

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

航海の安全を見守る神仏

江戸時代、堀川の舟運は熱田湊で全国津々浦々と結ぶ海運とつながっていた。当地の江戸廻船（沿岸航路をつなぐ輸送船）や大坂廻船といった千石船（弁才船の俗称）を所有する海運業者は、多くの場合に荷主でもあった。そうした海運業が育ってくるにつれて海難事故も大規模になってくる。海難事故は水主（船乗り）の命が危険にさらされるだけでなく、荷主である商人にとっても大きな損失をもたらす。「板子一枚下は地獄」と言われた当時の航海の現実を反映して、水主も荷主も神仏に航海の加護を祈り、堀川沿川の社寺に奉納し、祭礼の施主に就いた。そのため、堀川端には航海と交通に関わる神社が多く勧請され、鎮守社（その土地を守る社）にも江戸廻船講中（集団をなし神仏に詣でる仲間）などの灯籠寄進が目につくこととなった。



広井八幡社（泥江縣神社）境内の
献燈の脚部。江戸廻船と読める

住吉神社（住吉橋東詰）



堀川において航海の守護神の第一は住吉神社だろう。1800年前に摂津（大阪）に鎮座したといわれる住吉大社から享保9年（1724）に尾頭に勧請され、宝暦年間（18世紀中頃）に現在地に遷った。その頃からこの住吉神社は大坂廻船や江戸廻船講中による篤い崇敬を受けて、境内には当時を偲ばせる多くの献燈などが残っている。

高力猿猴庵は『尾張年中行事絵抄』の「尾頭 住吉祭」の項に、「今宵、神楽あり。此社は、船乗どもの信仰多くして、献燈数多あり」と記している。

尾州小早廻船寄進の常夜灯
（小早船は2～400石で速度が早い船）

金比羅社

商家の庭に祀られていた金毘羅神像（個人蔵）

海上の守護神としてポピュラーなのは「こんびらさん」である。讃岐国（香川県）象頭山上に鎮座し、金刀比羅宮と呼ぶ。かの地から海運国日本全土に広まったのが各地の金比羅社で、堀川端では円頓寺商店街の真ん中にも安政6年（1859）に遷座した立派な社がある。また、かつて尾頭橋近くに清須越の店の肥料商があり、天保年間より廻船問屋も営んでいた。その商家の庭には海上守護の金比羅堂が建ち、青銅の金毘羅神が祀られていた。



堀川だけでなく時代の新しい中川運河にも金比羅社がある。昭和9年（1934）に運河口近くに安全通行と町の発展を祈願して運河神社下社（金比羅大権言社）が、また小栗橋近くの右岸に運河神社上社（金刀比羅社）が祀られている。

遭難者供養碑と地蔵尊を戴く千石船

堀川端の寺には水主や荷主の建てた碑があり、光明院には、あまり例を見ない千石船に乗った地蔵尊の供養碑がある。

遭難事故の碑もある。三河佐久島生まれの小栗重吉は文化10年（1813）に督乗丸（約120トン）の船頭として師崎から江戸へ出航した。しかし帰還途中の伊豆沖で暴風雨に巻き込まれ遭難、船は海流に乗って太平洋を流され、文化12年にカリフォルニア州の洋上で救助されるまで484日間にわたって漂流した。彼は生還して笠寺の地に仲間達の供養碑を建立し、その碑はのちに成福寺に安置された。



左：成福寺に移された重吉の遭難者供養碑（熱田区白鳥） 右：光明院に建つ千石船に地蔵尊を戴く碑（伝馬橋南西）